

=研究ノート=

住谷悦治の生育環境と 社会福祉活動に関する素描的研究

A Sketching Research on Etsuji SUMIYA's Growing Environment and His Social Work.

加 藤 博 史

Kato, Hiroshi

本稿は住谷悦治の福祉観形成の基層となった生育環境と、彼の社会福祉活動を通して表明された福祉観を素描することを目的とした。その結果、以下の点を明らかにした。①住谷は、家族の愛育、大らかなエロス体験、スピリチュアリティ志向、等に恵まれた人であった。②これが基層にあったからこそ、住谷は戦後、社会福祉事業に関わることにより、厳しい運命へ前向きに生きる人たちの示す人間の真の尊厳、ボランティア活動の意義を学び得た。

The purpose of this paper is to research on the well-being philosophy of Etsuji SUMIYA. In Chapter 1, author explored the basic layer of the well-being view from the growing environment of SUMIYA. In Chapter 2, through SUMIYA's practice on the issues of people with intellectual disabilities, author examined his well-being philosophy that will be developed. Also, the author examined SUMIYA's philosophy on well-being for the blind. In this paper, the following points have been clarified. SUMIYA was a man blessed with the love and upbringing of his family. Therefore, he was able to learn specifically about human dignity through his involvement in social work.

はじめに

本稿は住谷悦治（1895－1987）の福祉観形成の基層となった生育環境を研究するとともに、社会福祉活動のなかで表明される住谷の福祉観の一端を素描することを目的とする。1章では、住谷の生育環境から福祉観の基層を探る。2章では、脇田悦三等との交友を通して展開されていく住谷の福祉観を検討する。関連して社会福祉法人京都ライトハウス理事長としての住谷の盲人福祉への見解に触れる。

I 生育環境と気質形成

1 生育環境

(1) エコロジカルな自然環境

住谷は、豊かな自然環境の中で育った。前橋市の西4キロ、高崎市の北6キロの関東平野の最北端に位置する上州国分寺の跡に出来た「国分村」が住谷の故郷である。東北に赤城山、西南に妙義山と岩船山、浅間山をはさんで西に榛名連山、北方の子持山の奥から利根川が流れ出ており、東南は宏大な関東平野へと桑畑が広がっている地形である（住谷1976t112.3）。

(2) 農業・養蚕業の生育環境

住谷は、養蚕を主な生業とする農村の自作農の家庭に育った。田畑の肥料は人糞である。少年の頃、前橋市へ「お得意何軒かへ荷車に長い形の大きい肥桶を四つほどのせて、それらお得意先の町の家のこやし（人糞）を買いに行かねばならぬ」のが住谷の仕事であった（住谷1976t112.3）。住谷はそれが嫌であった。後年、東大の新人会に入って、山川均を招いての座談会で、住谷は山川に、「社会主義社会は肥くみとりを誰がするのでしょうか」と質問して満座の学生たちの哄笑をかっている。そのとき、恥じ入る住谷に山川は、真剣な態度で聴

衆に向かい、「社会主義社会で肥え汲み取りが必要ならば、その社会で最も社会主義を理解した勇気のある青年たちが進んでするでしょう」と答えたという(住谷1976t112:3)。住谷のナイーブさと山川の人格性が伝わるエピソードである。因みに、住谷は後年、「わたくしに社会主義・マルクス主義の手ほどきをしてくれた思想家は、山川均先生であったといえる」(住谷1970:267)と記している。山川が生涯に亘って敬愛した同志社の恩師・柏木義円⁽²⁾、および、柏木と住谷の叔父・住谷天来⁽³⁾との信頼関係を考えると興味深い。

(3) 父母の愛、きょうだいの愛

住谷は父・友太、母・なん(軟とも表記する)に愛されて育った。住谷は以下の想い出を晩年に語っている。「小学校に出ないころのことであるが、毎夜のように寢床で眠りにおちるまで、母に抱かれて、里見八犬伝のいろいろの物語り」(住谷1980t157:3)を聴くことが楽しみであった。「母も昼の仕事の疲れで居眠りをはじめるとわたくしは抱かれたまま母を揺り起こして同じ物語をせがんだ」、「やむなく母はわたくしの眠りに入るまで同じ話を繰り返してくれた。」(住谷1980t157:3)。住谷が母親に存分に甘えて育っている様子がうかがわれる。

住谷の16歳の時、成績優秀でテニスの選手でもあった兄・亮一が、前橋中学校卒業の直前に結核性脳膜炎で急逝している。その8カ月後、17歳の時、婚礼を一週間後に控え幸福の真っ只中にあった異母姉・ひで(ひで子とも表記、悦治は英子と記している)を盲腸炎で亡くしている。5歳上のこの姉にかわいがってもらった思い出を晩年の住谷は綴っている。また、1938年に慶應義塾大学を出た弟・鉄身が34歳で肺結核により亡くなっている(住谷1978:109-117)。住谷悦治は、ひで、亮一の姉兄と、三郎、磐根、鉄身、申一、完爾の5人の弟の8人きょうだいであった(住谷一彦1988:25)。

住谷の家は、庭が広く、近所の子どもたち10人ほどが「鬼ごっこ」などして遊ぶ場所にもなっていた。後に画家となる弟の住谷磐根が3歳、悦治が10歳の時である。よちよち歩きの磐根が庭の奥にあった肥溜めに逆さになって落ち

た。そのとき、右手が曲がっている障害があり、軽度の知的障害もあって小学校にも行っていない12歳くらいのおギンちゃんが、片手で弟を救い上げてくれた（住谷1978t131:3）。大騒ぎになり親は弟を介抱して生命を取り留めたが、おギンちゃんは「とくにいいことをしたとは思わずにいたらしい。」。他日、住谷が「おギンちゃん、ありがとうよ」とお礼を言ったら、「何も答えず涙をたたえてわたくしをジット見上げていた」（住谷1978t131:3）とのことである。住谷の感謝の気持ちがおギンちゃんに伝わったのであり、住谷の眼も潤んでいたことであろう。住谷の障害のある人への姿勢はここに現れている。なお、この内容は、2年後の1980年8月の記事では、左手が不自由な「ときちゃん」と代わっている（住谷1980t159:2）。この頃の住谷の記憶は相当曖昧なものになっている。

2 気質形成

(1) 大らかなウイタ・セクスアリス

住谷の家は、比較的大きい養蚕家であった。蚕に桑を食べさせる繁忙期には、1、2か月間、新潟県より、10人から多いときは18人ほどの男女がお手伝いに住み込みでやってくる。しかも、年齢が17歳から30歳前後である。「会話や談笑は、殆んどセックスの話が中心であった。」（住谷1980t160:1）。住谷は、「わたくしの早熟さは、小学校時代からの毎年のこの賑やかさにつちかわれたようである。」「セックスの話など毎日おかしく面白くあたりまえの顔をして聞いていたものである。」と実に大らかに記している。

住谷は美的なものに心を動かされる心性を豊かに持っている。中学時代の旧友の影響で「スケッチ」を趣味とするようになった。それは、幼児の人形遊びのおもちゃと一緒に、「生活を豊かにし、多彩たらしめ、思いを深め、人生を楽しくして有意義につくりあげる」と述べている（住谷1968:74）。音楽に関しても、ダビッド・オイストラフのバイオリンとレフ・オポーリンのピアノによるベートーヴェンの「クロイツェル・ソナタ」を聴き、「第三楽章の華やかさに

わたくしは、自分の寿命を祝福されるような楽しい気持ちになって床を離れた」(住谷1978t128:3)と官能の愉悦を記している。

また住谷は、中学4年の時、前橋の古道具屋の柱に掛けてあった鈴木春信の遊女の絵に魅かれる。絵を凝視している自分に気づき、「自分を恥ずかしく思うのみでなく、あやしき胸のときめきを覚え、忘れられぬ印象を刻した」(住谷1970:228)。住谷は後日、恥ずかしさを忍んで絵を買い、「本箱の奥にしまい込んで、時々ひそかにひろげてはながめ」、官能に浸っている。

住谷は青年になってから、セックス本を友人と貸し合って読み、宇都宮の軍隊生活時代にも、「ある志願兵所有の何冊かの筆写本を借用して筆写した」とし、80歳代半ばとなっても、「《猥談文献》として棄てるのも惜しいので保存してある。」(住谷1980t160:2)と記している。

住谷は仙台の第二高等学校時代、教会で出会った「英語が素晴らしくよく出来る」「すみこ」という女性を好きになり、東大進学後、その女性が「ある大新聞社の記者と」結婚したことを知って衝撃を受け、1年近く引きこもったとされている(住谷一彦、住谷磬1993:372-373、なお、田中秀臣は、浪人中に彼女が婚約しているのを知ったとしている〔田中2001:32〕が、不明である。)。住谷自身の表現によれば「人生を生きぬく力の旺盛さのあった」住谷は、自暴自棄に陥ったのではなく、「一年間を赤城山の麓の親戚に居候し、かくれて静観し」、「涙を拭って上京して大学生生活に打ち込んだ」(住谷1968:258)とのことである。これを転機に、「自分一人の幸福のためだけ生きようという考え」を払拭し、おぼろげながら「社会」を発見したと述懐している。その2年後、友人の紹介で出会った5歳年上の「桔梗よし江」(仙台松島の桔梗屋旅館の娘)に熱烈な恋情を抱き、結婚に至るのである。つまり、住谷は“恋する情熱の人”である。ローザ・ルクセンブルクへの思慕も同様である。

(2) 海洋へのあこがれ

住谷は、1914年3月、前橋中学校を卒業し、「船乗りになって世界を廻ろう。異国の港々では楽しいロマンチックな生活もあろう」と考え（住谷1970:217）、「両親の反対を押し切って農村を脱出し、越中島の高等商船学校の入試を受けた」（住谷1970:218）。現在の国立東京海洋大学に当たる。結果は不合格であった。数理の知識が欠けていた。住谷は、ある夜、商船学校の「大成丸」の甲板に登り「マストに抱きついて泣けるだけ泣いて永遠に船乗りと訣別した」（住谷1968:258）。住谷が商船学校に入学しておれば、その後の人生行路は一変していたことであろう。住谷の基底気質には、大洋の遙か果ての未知の人々や文化への強いあこがれがあり、それは、自由と解放のシンボルへの憧憬とも言える。

不合格の結果の切り替わりは迅速である。住谷には粘着質的に執心するところがみられない。「家にオメオメと帰ることができなかった」ので、1か月食事つき7円で下宿し、中央大学予備校に通い、「一高受験には自信がなかったので、仙台二高を受験することに決めた。」（住谷1970:220）。その結果、7月に、4番で合格となった。

(3) 基底に流れるスピリチュアリティとヒューマニズム

住谷は、第二高等学校（旧制）の1年の夏休みに、函館のトラピスト修道院で無料宿泊を体験させてもらっている。そこで、修道士同士が道で行き交うたびに、「右手の人差し指を鼻のところに挙げて『メメントゥ・モリ』（死を思え）という特有の挨拶を交わす」（住谷1981t164:3）姿を印象深く受けとめている。住谷は1916年11月、高校の『尚志会雑誌』に「トラピスト修道院にて」を寄稿し、「聖く明るい神聖と、醜い暗い獣性と、精神生活と肉体生活と、内なる自己と外なる自己と、この二つのものの不調和に苦悩煩悶」していることを告白している。また、ヘブライズムとヘレニズムの調和も求めている（住谷1968:114）。本稿では触れないが、住谷は、叔父の住谷天来の影響もあり、生涯に互ってスピリチュアリティの希求志向を保持している。

住谷は、学生時代に、「賀川先生に傾倒」し、「神戸葺合新川の貧民窟に先生を訪ね」、「弟子の一人となる」（住谷「捨て石・埋め草」1969t27:2）と記している。河上肇への共感も含め、住谷の精神基底に、困窮にあえぐ人々と苦しみをかち合おうとするヒューマニズムが流れている。

（4）いのちあるものをケアする日常

住谷は、草花や小動物を愛した。家の庭では、植木や花を育て、散歩の途中で田んぼの畔から曼殊沙華をもらってきて植えて喜んでいた。また、小鳥を20羽ぐらい応接間で飼い、友人が「鈴虫」をもって訪れると、大層喜んで、友人を待たせたまま賀茂川まで行って鈴虫の為の砂をとってくるほどであった（山田1987t247:3）。

Ⅱ 知的障害のある人、盲人から学んだ福祉観

住谷と脇田悦三（1910－1978）は、1948年9月28日、GHQ 京都軍政部厚生課長のエミリー・パットナムの呼び出しの際に出会う。脇田は、同志社大学文学部神学科社会事業専攻を1940年に卒業している。嶋田啓一郎は、自身が教壇に立って2年目に脇田が入学してきたとし、脇田の人懐っこさに魅かれたとしている（嶋田1978t133:2）。脇田は、1931年ころ、児童演劇運動に携わっていたが、童話劇上演を通して聖ヨハネ学園園長・古田誠一郎に啓発され、三田谷治療教育院（1927年開設）の院長・三田谷啓さんだ やひらく⁽⁵⁾の下で知的障害児の療育を学び、脇田良吉(6)が日本で二番目に設立した知的障害者施設『白川学園』⁽⁷⁾の主事に1936年に就任して、良吉の長女・知子と結婚した。悦三は昭和の良寛と呼ばれた。なお、三田谷は苦学しドイツで学んだ医師であり、大塚達雄(8)の祖父（母の父）の宮川経輝から洗礼を受けた。また、糸賀一雄（福祉思想の父とされる）をキリスト教信仰に導いた松江高等学校（旧制）時代の親友の圓山文雄は、三田谷の下で実習しており、糸賀が知的障害児に関わる契機になっている。

脇田は戦時下でも、音楽、演劇、キャンプ活動を行っている。1945年秋、学園内に託児所を開設して所長となり、1946年、戦争で生まれた「浮浪児」のために、「保護収容施設北山寮」を一乗寺に設立し、寮長に就任している。これは後に、大江憲二に引き継がれ、現在の児童養護施設つばさ園となっている。大江と脇田は1931年以来、「京都童話教育研究会」を通しての付き合いである。京都の戦後の児童福祉は、脇田と大江、そして積慶園の古村正樹の3人によって担われる（大江1980t156:1）。脇田は1948年、良吉の死後、二代目園長に就任、1954年、日本初の知的障害児の幼稚園「ひなどり学園」（正確には「精神薄弱児幼児通園施設」）を創設した。1961年から1968年まで、全国の知的障害者施設の協議会（日本精神薄弱者愛護協会）会長を務めた（脇田1989:215-217）。脇田は、NHKの「精神薄弱児のために」と題する番組のプランナーを任じられ、また「精神薄弱者育成会」の機関紙「手をつなぐ親たち」にレクリエーション指導記事「遊びましょう」を連載して、市民や家族の啓発に努めた。

因みに、白川学園の創立当初は、河上肇が良吉のもとをよく訪れて支援しており（脇田1987t247:3）、学生時代の嶋田啓一郎も良吉に面会し、「全身是れ良心と信仰の塊りという古武士風の風格の人」であったと記している（嶋田1978t133:3）。住谷は、社会福祉法人白川学園の理事に、牧野虎次が逝去した後に就任している（脇田1987t247:3）。

住谷は、「精神薄弱の少年少女の友となり、食事・衣服・汚れものいっさいの世話」（住谷1977t117:3）をしている脇田を「仁兄」と呼び、脇田の逝去に当たって葬儀委員長となり、脇田が示した「良心の清澄と鋭敏は身分や階級を超越した『人間共通の宝』」（住谷1978t134:3）との言葉を脇田に捧げている。

住谷は、12年間3期に亘る同志社総長生活を1975年に任期満了で退職したが、並行して、1970年10月、鳥居篤治郎理事長死去の後を襲って、社会福祉法人京都ライトハウスの理事長に就任し、1981年4月に退任している。

鳥居の死後ただちに、副理事長の守屋正（京大卒、陸軍軍医大尉として従軍。医

学博士、白川学園理事でもある)と常務理事の田村敬男、理事の加藤重雄が総長室を訪れ、理事長就任を懇願したが、住谷は固辞している。数日後に守屋が再訪し、床に座し落涙して懇願すると、人情家の住谷は、「無力をも顧みず引き受けることにした」のである。帰宅すると子息の住谷馨は、「親爺は何んという⁽¹²⁾ドン・キホーテだ」と酷評したという(守屋1987t247:2)(住谷1977t127:3)。住谷はここで盲人福祉問題への理解を深める。就任に際して住谷は、盲人福祉を「基本的人権を守るという原点に立って捉え、その実践を図ってまいりたい」(住谷1970L19:1)と表明している。また、「よき協力者であり、よき盲人のパートナーであるボランティアの方々」の「一層強力なご協力ご支援」を願っている。当時、京都ライトハウスには、点訳班、点写班、読書班、録音班、代筆班、手引班ボランティアがあり、登録者は、1966年の段階で400名を越えている。

住谷は、守屋から点字を発明したルイ・ブライユの事績を教わり、以来、ブライユを敬愛し、肖像画を書斎の机の上に飾り続けた(守屋1987t247:2)。また住谷は、京都ライトハウス船岡寮(盲人養護老人ホーム、1974年6月開寮)に入所する全盲の田中フミエさんの紹介をしている。住谷の15歳年少の田中さんは3歳の時にハシカに罹り失明し、按摩を業とし小学校にも行っていない。非常な努力をして和裁を身に付け、船岡寮に入ってから、カナ・タイプライターの技術を修得した。住谷は、今ある状況の中でポジティブに関わって社会参加と生き甲斐を切り拓いていく田中さんを「誇りともし、その生き方に敬意を表してやまない」(住谷1977:66)とともに、このような機会を提供する京都ライトハウスに携わる喜びを感じている。住谷は、「盲人を無力のものとしめこくこと」をモットーに、鳥居篤治郎が示した「盲人への施設の程度は日本文化の程度を示し、日本文化の尺度である」(住谷1976t113:3)との遺訓を拳拳服膺している。

住谷は理事長就任中の1976年9月、『改訂増補山本覚馬傳』を監修し、同志社の支援の下に出版している。山本は、「同志社」の名付け親である。この刊行意図は、山本が維新後、ほとんど失明に近い状態で、かつ1872年頃より歩行

困難になっていたこと、および住谷自身の視力低下とも関連している。

本書は、1928年刊行の青山霞村の原著を基に、杉井六郎同志社大学人文科学研究so教授を総括執筆者とし、原著者遺族の了解も得て改訂増補したものである。編集は、田村敬男（たむらゆきお、1904-？、当時、京都ライトハウス常務理事兼盲人養護老人ホーム船岡寮長）が担当した、田村は、山本宣治が代議士に出馬する時の選挙対策本部の中心人物であり、住谷が1932年に初めて翻訳書を上梓したときの出版社主であり、竹中勝男⁽¹³⁾が戦争末期に出版した厚生学論書『勤労と厚生』（1942）の出版責任者でもある。

また、嶋田啓一郎は、次のように認めている。「苦しくも楽しい思い出の一つは、住谷総長を盲人施設『京都ライトハウス』の理事長に迎え、私は常任理事として先生をお助けしたことである。」（住谷一彦、住谷啓1993:20）。京都ライトハウスは、嶋田との関りも深い。

最後に、住谷と山田幸次郎との関係に触れておきたい。山田は、白川学園機関紙・月刊『つくも』の印刷所「山田印刷」の経営者である。印刷所は京都市上京区の千本丸太町の西に在り、筆者（=加藤）は同志社大学大学院時代の1972年に小倉襄二⁽¹⁴⁾の紹介で、山田から著書をいただいたことがある。竹中勝男が所長の京都社会福祉研究所は山田印刷の近くにあった。この研究所の設置経緯を概説する。京都府社会福祉協議会の前身は、「京都府慈善組織協会（1918年7月）」であり、「京都府社会事業協会（1922年10月）」、「京都府厚生事業協会（1942年4月）」、「京都社会福祉協会（1948年6月）」と変遷してきた。この京都社会福祉協会が、1948年6月の理事会で研究機関として「社会福祉研究所」設立を決定し、副会長の竹中を所長として9月1日に発足した（京都府社会福祉協議会1985:12-13）。研究所では住谷らを所員とし、都築秀夫（筆者面談時は関目学園園長）を主事、助手に大塚、小倉、豊田慶治（小倉の1年先輩、後に京都市民生局）らが任じられた。この関係もあり山田印刷に住谷、脇田、小倉、豊田、大塚らが入り出した。大塚は結婚披露宴を山田印刷で執り行っている。職員は社会的な

事情のある人が多かった。住谷とのゲラ原稿渡しには、積慶園の子どもたちが住谷夫妻からもらうお菓子目当てに「お使い」の取り合いをした。山田と住谷は、住谷が松山高等商業学校教授時代（1937-1942）からの付き合いで、総長になってからも学園紛争時、疲れ果てた住谷が昼寝をしに訪れていたという。山田は、糸賀と住谷を尊敬しており、住谷とコーヒーを飲みながら「哲学の話ばかり」していたという（山田1985t247:3-4）。

Ⅲ 住谷が表明した人生観、福祉観、老齡観の一端

住谷は総長時代に人生の意義について、「才能の優劣とか、知識の大小」、「体格の大小・強弱」、「民族・国家さえも超えて」、「この世に生まれた自分にあたえられたところのものを、全力をあげて現在の仕事に打ち込んで、誠実に努力することだ」（住谷1967:8）と述べている。そしてその努力の目的は、「人類の幸福」であると指摘した。したがって、ここでいう「仕事」とは、狭い生産労働の意味ではなく、重い知的障害のある人にとっては、生きる喜びを発見することや共感することを意味している。住谷の基本的人生観と言える。

そして住谷は神の下の平等という人間観に則り、白川学園や京都ライトハウスの経験を通して、次のように福祉観を述懐する。「社会の多くの身体障害者・肢体不自由者・知恵おくれの子供たち、孤児・浮浪児・老若男女の盲人たち・聾啞の少年少女たちは、すべて神のつくり給うた人間であり、平等の権利を有つ貴い人間であります。現在の不完全な国家・社会によって十分に手が届かず軽視され忘れられ放置され、また家庭生活の重荷になっている人びとを、真の平等な新社会を実現するための歴史の過渡的な段階として、真実の勇氣ある人びとが進んでその任に当たっています。世間の人びとが顔をそむける状態に自主的に取り組んで、それを人生・社会における使命感と義務感に燃えて生きている人びとは、真に社会の宝であると信じます。」（住谷1976t112:3）。以上の住谷

の「真実の勇氣ある人びと」、「世間の人びとが顔をそむける状態に自主的に取り組む」との言葉は、東大新入会での「人糞汲み」に関する山川均の言葉とこだまする。

現今の社会システムにおいて疎外された人たちの人間としての尊厳の回復に、徒労ともおもえるような尽力を坦々と、ときには歓びに満ちて行っている人たちに、住谷は、深い共感と感謝を捧げている。このような社会福祉事業への理解は、所得再分配や労働者階級の権力奪取を主眼とする社会主義研究者には見出し難いものである。おそらくそれは、住谷の幼少期からのエロスとパトスの豊かな醸成が、「正義」や「主義」などのロゴスの世界との均衡として働き、一元的原理主義に陥ることを防いでくれたのではなかろうか。また社会福祉実践家や障害のある人たちとの交友が、「階級」を止揚した深い人間観を住谷にもたらしたと考えられる。つまり、マルクス主義の論理体系とキリスト教の愛の信仰が、社会福祉実践によって、住谷の中で〈権利保障〉と〈共生〉という形で融合されたのではなかろうか。

82歳の住谷は次のように述懐している。「老齡は、私たち人生の一つの段階である。人生の他のすべての段階と同じように、老齡は、固有の容貌、独自の気持、特殊の歓びと悩みをもっている。老齡には、老齡で必要なことをしなければならないという任務が課せられている。老いているという事実は、若いという事実と同じように、価値ゆたかな役割をになうものである。」(住谷1978t132:3)。やがて住谷に訪れる認知症も、住谷が「任務」として身をもって示す人間の尊厳の姿であったのであろう。ちょうどそれは、住谷が全盲の田中フミエさんから学んだ〈限界的状态の中でポジティブに生きる〉ことであり、盲人を無力のものとしないと同様〈認知症を無力のものとしなくて〉と響き合う思想と言える。住谷が、このような〈老いの意義〉を語り得たのは、戦後の社会福祉実践の体験があったからではなかろうか。

結語

本論稿では以下を明らかにした。①住谷は、両親と家族による愛育、農業によるエコロジカルな暮らし、大らかなエロス体験、ロマンティシズム・芸術への愛好、スピリチュアリティ志向、ヘブライズムとヘレニズムの調和、賀川等のヒューマニズムへの敬慕、に恵まれた人であった。②これが基層にあったからこそ、住谷は戦後、社会福祉事業に関わることにより、重い知的障害のある人の「良心の清澄」、その糞便の世話をし、同じ目線で「遊ぶ」重要性、厳しい運命へ前向きに生きる盲人の示す人間の真の尊厳、ボランティア活動の意義を学び得た。③晩年に表明される「老いの任務」は、住谷の思想的結実と言える。

人間の幸福の必要条件が正義であり、十分条件が愛だという考えがある。住谷は、〈正義〉を人権や社会主義、経済学史というロゴスの世界に求めたが、それが常に、住谷の生育歴からもたらされた〈愛〉というエロス（生命愛）の世界と止揚されたため、住谷の〈正義〉がロゴスの世界での自己目的化に陥ることはなかったと考える。この検証は今後の課題である。本稿において、住谷の思想の基層にある生命愛が生まれた生育歴と、住谷の〈正義〉と〈愛〉の思想が、社会的疎外状況にある知的障害・視覚障害のある人の尊厳の回復という、戦後の社会福祉課題に関わることによって、より具体的に展開され深化した一端を明らかにした。

注

- (1) 山川均（1880－1958）は、岡山県倉敷市生まれ。1895年3月、同志社補習科に入学。翌年、同志社の学制が改められたため、尋常中学3年に編入となる。その翌1897年春に退学している。つまり14歳の春から丸2年同志社で寄宿舎生活を送った。山川は柏木義円から聖書講義のほか、代数、地理も教わっている。1950年、山川は、

「私が一生に聞いた人間の言葉のなかで、柏木先生のほどトツ弁なものがないが、またそれほど熱誠のあふれたものもなかった。」「聖書の講義のときの柏木先生のお祈りは、心から天の父に求める赤子の声だった。」(山川均1951『ある凡人の記録』朝日新聞社、1951:183-184)と記している。山川は退学に際して、少しの間、柏木夫妻の家で世話になっているが、その清貧さに「これが聖徒の生活」と感心し尊敬している。

- (2) 柏木義円(1860-1938)は、新潟の真宗寺院に生まれたが、すぐに父を亡くし、困窮の中で師範学校を出て、1878年、群馬県安中の細野西小学校校長となる。嘘言癖で悩んでいた彼は、新島襄の安中伝道を通してその人格に触れ、1880年12月に上洛し、1881年9月、同志社英学校に入学する。しかし学費が続かず、1年たらずで退学する。この間、新島襄に強い感化を受けている。再び、細野東小学校の校長をしていたが、1884年、海老名弾正から洗礼を受け、同志社英学校に再入学する。同窓には徳富蘆花がいたとされるが、微妙な認識のずれがあり、蘆花は1886年に再入学し3年に編入したので、たまたま柏木と同級生になっている(片野真佐子作成の「柏木義円略年譜」は最初の入学年と合わせ2か所の誤記がみられる。片野2014:448)。自分を偉大に見せる嘘言癖を新島に告白し詫びたことをきっかけに、新島の大きな信頼を得て、1889年、卒業とともに同志社予備学校主任となる。翌年1月の新島の死に際して、遺体が自宅に戻ったとき、金森通倫の指名で最初に祈祷したのは柏木である。柏木は1897年、安中教会の牧師となる。柏木は、「頭がおかしい」と言われながら、死ぬまで非戦の姿勢を貫いた。
- (3) 住谷悦治の父の弟であり、住谷の思想に大きな影響を与えた住谷天来(1869-1944)は、柏木によると「篤実真摯敬虔誠実の人」(大崎2014:44)とされる。1888年3月4日、高崎教会で新島門下生・熊本バンドの不破唯次郎から洗礼を受けている。1896年、内村鑑三と出会い感化を受ける。天来は、明治末から伊勢崎教会の牧師をしていたが、1918年4月、柏木らの推薦で富岡の甘楽教会の牧師となる(46)。この間、1916年9月4日、甥にあたる住谷悦治に洗礼を授けている。洗礼を受けることが決まってから、住谷悦治の心は揺れ動く。日記で、天来から洗礼の意義を説く手紙をもらい、感激しつつ「生活ますます墮落す。嗚呼、弱き者よ」(6月18日)と記し、翌々日には、「宗教の奇跡が信じられない」、「恋と名誉の払拭」(住谷一彦他1997:137)に悩んでいる。21歳の青年の純情な正直な気持ちが看取れる。受洗して住谷悦治は、「高き生と清き生活のために身を捧げたい」(138)と決意するのである。天来は、1944年1月27日に死去し、遺族代表挨拶は悦治が務めた。
- (4) 嶋田啓一郎(1909-2003)は、金沢市に生まれ育つ。縁戚の矢内原忠雄の案内で新渡戸稲造に会い励まされ、宣教で嶋田宅に宿泊した賀川からは、同志社で学ぶことを奨められる。1935年に同志社大学文学部神学科を卒業し、1936年から竹中勝男の下で助手として社会事業専攻生を教える。その後、助教を経て教授。シカゴ大学に留学。住谷啓の恩師でもある。日本社会福祉学会代表理事、京都府社会福祉審議

- 会会長を歴任。(横山譲2004「嶋田啓一郎」『社会福祉の先駆者たち』筒井書房)
- (5) 三田谷啓(1882-1962)は、西宮市の貧農の家に生まれ、18歳の時家出をし、電話交換手として働いていた時に、日曜の朝、訪れた教会で宮川経輝牧師の説教を聞いて感激する。苦学して1905年に大阪府立医学校を卒業。富士川游、呉秀三の知遇を得る。1910-1914年、ドイツ留学、知的障害児教育について学ぶ。この間も宮川牧師夫妻が心の支えとなる。1918年、大阪市社会局児童課長となり「児童相談所」を設立。1927年8月、三田谷治療教育院を創設。(相澤譲治1989「三田谷啓」『日本社会福祉人物史(下)』相川書房、ほか参照)
- (6) 脇田良吉(1875-1948)は、現在の福知山市大江町二俣近くの河守上村で生まれた。1895年、京都府師範学校小学校教員講習会修了。1898年、京都市淳風小学校訓導となる。1900年、学業不振児に下宿で補習を開始。1905年10月、淳風小学校内に教員組織「春風倶楽部」を組織し、地域の発達遅滞児や素行不良児に補習。1906年、滝乃川学園(日本初の近代的知的障害児施設)、家庭学校、東京盲啞学校、東京養育院等を見学。1907年、伊澤修二宅の「楽石社特殊教育部」見学。東大の元良勇次郎(同志社英学校第一回入学生、ジョンズ・ホプキンス大学でジョン・デューイに学ぶ。1890年帝国大学教授。日本の心理学の祖とされる。)の下で障害児教育研究。1908年4月、京都府教育会より「成績不良児教育」の調査を委嘱。『注意の心理と低能児教育』を刊行。同年5月、石井亮一(米国でエドアール・セガン夫人から知的障害児教育を学ぶ。滝乃川学園創設者)・筆子(亮一の妻、後継者)立会いの下、滝乃川学園礼拝堂で受洗。「(白川学園沿革小史)白川学園ホームページ、ほか参照)
- (7) 白川学園は、1909年7月3日、京都府教育会の事業として、現在の左京区百万遍の山内に創設。園長は京都府師範学校校長。開設当初、脇田良吉は主任教員の位置づけであった。入園児童は3名。1912年4月、白川学園は良吉の個人経営となる。1925年10月、現在地(京都市北区鷹峯)に移る。「(白川学園沿革小史)、ほか参照)。
- (8) 大塚達雄(1924-1999)は、同志社総長を務めた大塚節治の子息として厳格なキリスト教家庭で育つ。母は宮川経輝の三女。海軍経理学校を卒業し、海軍主計少尉で敗戦。1946年、父の奨めで同志社大学法学部経済学科に入学し、在学中、竹中勝男の奨めで「社会福祉研究所」に関わる。1954年、同志社大学文学部社会学科助手となる。1955年、京都YMCAが母体となった肢体不自由児療育キャンプ事業で中心的役割を果たす。1972年、京都障害児福祉協会設立。(野村武夫2004「大塚達雄」『社会福祉の先駆者たち』筒井書房、ほか参照)。
- (9) 牧野虎次(1871-1964)は、滋賀県日野町に生まれ、1885年に同志社英学校に入学。87年に金森通倫から受洗。新島の葬儀では受付係を務める。エール大学卒業後、1933年、東京家庭学校校長、38年に同志社大学学長、1941-1947年に同志社総長を歴任。戦後、京都府社会福祉協議会会長も務めている。(本井康博2003「牧野虎次」『同志社山脈』晃洋書房、ほか参照)
- (10) 鳥居篤治郎(1894-1970)は、京都府丹後半島の宮津に流れ出る野田川沿いの与

謝野町三河内に生まれる。4歳で失明。京都市立盲啞院、東京盲学校師範科を卒業。三重盲啞院教員、京都府立盲学校教諭として勤務。1948年8月、日本盲人会連合が結成され、鳥居は副会長となる。同年9月、京都府盲人協会が結成され、鳥居は初代の会長も兼ねる。1955年6月、鳥居は日本盲人会連合の岩橋武夫の後を継いで第2代会長となる。1959年、日本盲人福祉委員会理事長に就任。1961年、京都ライトハウスを創設。常務理事・館長となる。1966年、京都ライトハウス理事長就任。(編集委員会1993『道ひとすじ—昭和を生きた盲人たち—』あずさ書店、ほか参照)。

- (11) 「ライトハウス」は盲人の暗闇を照らす灯台の意味で、岩橋武夫が、1935年に大阪の施設で命名した。これが現在の「日本ライトハウス」である。京都ライトハウスは、鳥居が中心になって創設された。1951年5月、「盲学生に点字図書館を」のスローガンを掲げ、鳥居らによって「愛の鉛筆運動」が始められた。そうした資金も含めて公的助成も得て、府立盲学校近辺の鳥居の土地が寄付され、1961年3月31日、社会福祉法人京都ライトハウス設立認可となる。1962年11月、ボランティア団体「ライトハウス友の会」が発足。1964年12月、友の会機関紙『友』創刊。鳥居は、友の会のボランティアは200人を越えていると記している。1968年10月、現在地に移る。(「50周年資料・沿革詳細版」京都ライトハウスホームページ、ほか参照)。
- (12) 住谷馨(1926-2009)は、住谷悦治の二男。兄は一彦。病氣療養や映画関係の仕事を経て、1956年、同志社大学文学部社会学科社会福祉専攻を卒業。2年後、同大学院修了。同志社大学文学部助手、講師、助教授を経て、1972年、教授。地域福祉が専門。滋賀文化短期大学学長も務めた。
- (13) 竹中勝男(1898-1959)は、長崎県平戸生まれ。1921年、同志社大学神学部卒業。ローチェスター大学で学ぶ。23年、シカゴ大学でM.A.取得。24年、東大大学院でも学ぶ。1928年9月、同志社専門学校教員となる。1931年4月、同志社大学文学部助教授、1936年4月、教授となる。戦時下では、厚生学を唱えた。戦後、住谷悦治を同志社大学に復帰させる中心的役割を果たす。1950年、『社会福祉研究』を刊行。1953年、参議院議員選挙に日本社会党から立候補し当選。(小倉襄二2004「竹中勝男」『社会福祉の先駆者たち』筒井書房)。
- (14) 小倉襄二(1926-2014)は、京都市生まれ。1950年、同志社大学文学部社会学科(旧制)卒業。同志社大学文学部助手、助教授を経て、教授。新島学園短期大学学長を歴任。住谷悦治と竹中勝男を恩師としている。

参考文献

住谷tとしたものは、白川学園機関紙『つくも』掲載記事である。住谷tに続く番号は『つくも』の発刊号数。住谷以外の『つくも』掲載記事は以下の通りである。史料提供に関して脇田宣様(良吉の曾孫)から高配を戴いた。

- 嶋田啓一郎 (1978t132:2-3) 「弔辞」。大江憲二 (1980t156:1) 「三人寄れば」。脇田豊 (1987t247:3) 「住谷悦治先生を偲んで」。山田はま子 (1987t247:3-4) 「先生のお人柄」。守屋正 (1987t247:2) 「住谷先生を憶う」。
- 住谷 L としたものは、京都ライトハウスのボランティア組織の機関紙『声』の掲載記事。
- 片野真佐子 (2014) 『柏木義円資料集』行路社。
- 京都府社会福祉協議会編纂委員会 (1985) 『京都府社会福祉協議会三十年誌』京都府社会福祉協議会。
- 大崎厚志 (2014) 「非戦・平和の思想家 住谷天来の研究」聖学院大学大学院博士審査論文。
- 住谷悦治 (1967) 『同志社の一隅から』法律文化社。
- 住谷悦治 (1968) 『あるところの歴史』同志社大学住谷・篠部奨学金出版会。
- 住谷悦治 (1970) 『鶏肋の籠』中央大学出版部。
- 住谷悦治編 (1975) 『現代史の証言 2 戦時の国民生活』汐文社。
- 住谷悦治、住谷馨 (1977) 『すばらしい老年期 (OP 叢書)』ミネルヴァ書房。
- 住谷悦治、住谷馨 (1978) 『続すばらしい老年期 (OP 叢書)』ミネルヴァ書房。
- 住谷一彦 (1988) 「父を語る」(『同志社時報』84号)。
- 住谷一彦、住谷馨 (1993) 『回想の住谷悦治』自家版。
- 住谷一彦・住谷馨・手島仁・森村方子 (1997) 『住谷天来と住谷悦治』みやま文庫。
- 田中秀臣 (2001) 『沈黙と抵抗 ーある知識人の生涯、評伝・住谷悦治』藤原書店。
- 脇田豊 (1989) 「脇田悦三」(田代国次郎、菊池正治編著『日本社会福祉人物史 (下)』相川書房)。

(第21期第1研究会による成果)